

台湾北部紅頭道士の超抜

松本 浩一

Chao-ba Ritual of Red-head Taoist in North Taiwan

Koichi MATSUMOTO

Abstract

Chao-ba ritual (超抜) performed by Red-head Taoist (紅頭道士) at Zhao-ming Miao (昭明廟) in Taipei City Song-shan Ward (台北市松山区) aims at liberation of departed spirits from hell who cause clients' bad luck and illness, and giving them vegetarian foods and clothes, sending them to the celestial world. And by performing this ritual clients' bad luck will be improved and illness will be cured. This ritual consists of becoming a believer to Tao, Taoist Canon, and Taoist Master, inviting Heavenly Worthy who Rescues from Suffering (太乙救苦天尊), inviting five boys who guides departed spirits, praying to Heavenly Worthy who Rescues from Suffering for rescuing departed spirits, declaring the petitions and purposes of this ritual, inviting departed spirits from hell to sacred place at which this ritual is performed, giving them clothes and sacred water, praying Three Pures (三清) and Heavenly Worthy who Rescues from Suffering to relieve departed spirits and make them transcend, and giving them sanctified foods. It's aim is same as the aim of Da-cheng ritual (打城) performed Red-head Priest (紅頭法師) in Tainan City (台南市).

キーワード：超抜、紅頭道士、普渡、正一派道士、死者のたたり、太乙救苦天尊

はじめに

台湾北部の紅頭道士の行う呪術儀礼について、前論では最も頻繁に行われる儀礼である祭解を紹介した¹⁾。この儀礼は、その人の生まれ年の干支とその年の干支との関係で、その年の運勢に悪影響をおよぼしている煞神に、悪さをすることなくお引き取りをいただくことを願うための儀礼であったが、ここで紹介する超抜という儀礼は、依頼者の病気や災害が、依頼者と様々な因縁を持つ、死者の

たたりによって引き起こされていることが判明した場合、その死者を救済することによって、たたりから解放され病気や災害の原因を除くことを目的としている。すなわち前論で紹介した、台南の紅頭法師の行う打城という儀礼と同様の目的を持っている²⁾。

打城は、南部の烏頭道士の行う葬送儀礼、いわゆる功德という儀礼に基づいているが、北部の紅頭道士は葬送儀礼に携わることがないこともあって、超抜は彼らの行う普渡の儀礼に基づいているのが特徴である。すなわち

超抜は、小施という名もあるように、小規模な普渡という性格をもち、唱える文章や呪句も、『靈宝正一蒙山玄科』という普渡に用いるテキストから抜粋したものを用いている³⁾。

超抜において救済する対象となる靈魂については、祖先、冤親債主、嬰靈の三種が区別されている。冤親債主とは、前世において恨みを受けたり、こちらが悪いことをしたりして、負債を負っている靈魂のこと、嬰靈は子供供の靈を指す。

超抜の調査は、日台交流協会の研究者派遣事業の援助を受けて、2002年の4月から6月にかけて台北に滞在した際に、しばしば見学し説明を受けたが、今回の分析には、4月24日に李游坤道長が行ったもの、および2003年3月7日に、文部科学省の科学研究費を受けて調査を行った際、同じく李游坤道長が行ったものとを、ビデオに収めたものを主な資料とした。さらに聞き取り調査は、主として2002年の6月24日、8月27日（科学研究費による）、および2003年8月27日（科学研究費による）に李道長の自宅の壇で行った。

1. 超抜のための壇の準備

超抜のための壇は、祭解が行われる壇の左側に、廟の外側に向かって設えられる。外側には陶器製の炉が置かれ、その前に水もしくはお茶を供えるための小さな赤色の碗が3箇、その前にやはり小さな赤色の碗が3箇酒を供えるために置かれるが、後者は祀る靈が子供の場合には供えない。そしてその前に、素食すなわち精進料理の食べ物を入れる碗が、8箇もしくは10箇並べられ、その前に米の飯を入れた茶碗と箸が供えられる。これらの供え物は専門に扱っている店があるのだという。やはり子供の場合には、素食の代わりにお菓子などが供えてある。そして炉の外側には、銀紙と、死者の服や梳(くし)・靴など

十種の物を印刷した、冥衣と呼ばれる紙銭の一種が置かれる。また時に果物が供えられることもあるが、これはさきに神に捧げて拝々した後に、もってくるならいいのだという。

これらの供え物は、祀る靈が祖先の場合であれば、一人につき一組、嬰靈もしくは冤親であれば、一家で一組必要になるという。炉には嬰靈の場合であれば、「沈淪嬰靈 位蓮位」、冤親であれば「本人冤親債主蓮位」、祖先の場合であれば祖先の名前が記された靈位が置かれる。

卓には、竹の枝に付けられた「太乙救苦天尊」と書かれた幢が用意されるが、これを挿しておくためにはおみくじを選ぶための、細く長い竹の板が入れられた大きな壺が用いられることが多い。この他に、小さな水を入れた壺に花のついた小さな枝が入れられたもの、米と花びらが混ぜられたものを入れた碗、長さが10センチほどの拍子木の片方のような木片(拍板)などが用意される。

2. 超抜の儀礼内容

(1) 三皈

はじめに道士は卓に向かって、手前が三鉢のような形をした鐘を右手で鳴らし、左手で拍板を取って、中央・右・左と三回卓を打ち、鐘を鳴らしながら、節を付けて次のような句を唱え始める。これは句の中に見えるように、道・経・師に対する帰依を示し、三回とも「往生昇天界」と唱えるところで、それぞれ左手に訣(印)を結び、前方・右方・左方に向かって礼をする。ここでは親指と人差し指で円を作る訣(三清訣)と、親指と中指で円を作る訣との二種類を用いる。

稽首皈依道 道超太極先
道分天地主 道妙判人間
願垂道寶力 超度此孤魂
往生昇天界

【稽首して道に帰依する。道は太極の先を

超え、道は分かれて天地の主となり、道は妙にして人間を判ける。願わくは道の宝力を垂れ、この孤魂を超度し、往生して天界に昇らしめんことを】

稽首皈依經 經本噴天書
經開赤明劫 經廣度衆生
願垂經寶力 超度此孤魂
往生昇天界

【稽首して經に帰依する。經はもと天書を噴き、經は赤明の劫を開き、經は広く衆生を度す。願わくは經の宝力を垂れ、この孤魂を超度し、往生して天界に昇らしめんことを】

稽首皈依師 師相立天根
師恩八十化 師氣摩尼尊
願垂師寶力 超度此孤魂
往生昇天界

【稽首して師に帰依する。師は相して天根を立て、師の恩は八十化、師氣は摩尼の尊。願わくは師の宝力を垂れ、この孤魂を超度し、往生して天界に昇らしめんことを】

(2) 三宝

三寶高真作證明、作證明證明

施食、此功德作證明

證明功德大天尊

この最後の天尊号は二回くり返す。次の句は節を付けずに唱える。

太上垂慈濟 憫念在寒庭
拔度衆孤魂 齊心誦救苦

【太上は慈濟を垂れ、憫れみの念は寒庭にあり、多くの孤魂を抜度し、心を齊しくして救苦を誦す】

ここで線香を左手の親指と人差し指で持ち、さらに人差し指と中指の間に幢をはさみ、以下を節を付けて唱えながら、卓を三回回る。

大聖 太乙救苦天尊

大聖 廣度沈淪天尊

大聖 超陵托化天尊

ここでは「太乙救苦天尊」の号は九回唱える。これは道教の最も普遍的な地獄である九

幽地獄が九層になっており、八十一回救苦の声を聞くという意味があるのだという。そして卓の正面にもどって、親指と人差し指の訣を結んで、前方・右方・左方・前方に礼をする。

東極宮青華府、浩劫垂慈長樂土、應化玄元妙道身、至今瑞相天人父、執揚枝洒甘露、遍滿虚空無量數、惟願慈尊降道場、孤魂朝禮青華府

大聖太乙救苦天尊

【東極宮の青華府は、浩劫にわたって慈を垂れ長く楽土とす。玄元妙道の身に応化し、今に至るも瑞相は天人の父。楊枝を執りて甘露を洒き、虚空に遍く満ちること無量數。ただ願わくは慈尊の道場に降り、孤魂は青華府に朝礼せんことを】

上の句も節を付けて唱えるが、「甘露」の部分の唱えるときには、花のついた枝に水をつけて符のようなものを描き、最後にはじくようにして水を撒く。これを「押花号」と称する。

(3) 召請

次に五方に向かって五方の引魂童子を召請する。道士は前と同じように、左手の親指と人差し指で線香を、人差し指と中指で幢を挟み、以下の句を節を付けて唱えながら、それぞれ右前方(東)・右横(南)・左前方(西)・左横(北)・前方(中)に向かって幢を振る。召請(東南西北)中方(青紅白黒)黃衣引魂童子、手執(青紅白黒)黃靈幡、開彼(東南西北)中方路、接引此孤魂、往生東極妙岩宮、太乙尋聲來救苦

【中方黃衣引魂童子を召請する。手には黃靈幡を執り、彼の中方路を開き、此の孤魂を接引し、東極妙岩宮に往生せしむ。太乙尋聲(救苦天尊)來たりて苦を救わんことを】

次に幢を置き、線香だけをもって以下の句を節を付けて唱える。

召請五方童子五方來、各執幢幡五路開、直向五方開道路、接引孤魂早歸來、早歸來承功

徳、上蓬萊得逍遙、逍遙無罪礙、得逍遙無罪礙

大聖來臨法會天尊

【五方童子を召請する。五方より来り、各々幢幡を執って五路が開かれ、直ちに五方に向かって道路を開き、孤魂を接引して早く帰り来させ、早く帰り来させて功德を承けさせ、蓬萊に上って逍遙を得させ、逍遙して罪礙なく、逍遙して罪礙なきを得させよ】

最後の天尊号は二回唱える。

(4) 香花請

そして鐘を置き右手に線香をもって、以下の句を唱える。

香花請 香花奉請

白揚風起夜沈沈

沈滞幽關纔信音

音信不知穹暗想

想魂難得再追尋

尋聲救苦聲聲應

應念垂慈念念深

深感大悲弘誓願

願召孤魂出幽冥

【白揚に風が起こって夜は沈沈、沈滞する幽(冥界の)関にわずかに音信が届く。音信は深く暗いところの想いを知らない、魂の得難きを想い再び追尋する。尋聲救苦(天尊)は声々に応じ、念に応じて慈を垂れ念はいよいよ深い。(天尊は)深く大悲を感じ弘き誓願をなす、願わくは孤魂を召し幽冥を出さしめんことを】

香花請 香花奉請

最後の「香花請」の部分では、一字を読むごとに、拍板で中央・右・左を打つ。

(5) 宣疏

続いて、道士は疏文に書かれた住所と名前を読み上げていき、依頼者一人分がおわること、霊位の前に置かれた炉に線香を指す。

そして道士は以下の文を宣する。

具有口意、謹當敷宣、慈尊采聽、今據臺灣省吉宅、立壇奉道建經、祈安植福沐恩、誠心涓

此本月 日吉旦、仗道抵結治華壇、修設靈寶、旦夕上答天恩、良愿下度孤魂超生、恭祈迪吉迎福方來等、因痛念孤苦之衆、久墜幽陰、未經荐拔、何得超昇、是夜施主大發慈心、外備甘露、孤筵雅齋、妙供斛食、經衣冥財等式、羅列場所、施與衆等、本處界内、十傷男女、無主孤魂滞魄等衆、孤魂昇天、恩庇合信人等迪吉、男女老少平安、家家獲福以東土、戸戸生祥以古郷、千般如意、瑞氣盈莊等、因以今恭對、三寶殿前、給出幢幡乙手

【具に申し上げるべきことを、謹んで述べあげます。どうか慈尊よ、お聞き下さいますように。今台湾省の吉宅に、壇を立て道を奉じて経を建て、平安を祈り福を植え恩に浴することを願います。誠心からこの月某日の吉旦を選び、道によって華麗な壇を結び治め、靈宝を修設し、朝夕に上は天の恩に答え、下は孤魂を救って超生させて下さることをお願いいたします。謹んで吉に導き福のまさに来ようとするのを迎え、一人に苦しむ者たちが久しい間幽陰に墜ち、未だに薦拔を経ず、超昇することができないのを痛念し、この夜施主は大いに慈悲心を發揮して、外に甘露・孤魂のための席・雅な齋・妙供・多くの食・経衣冥財等を具え、祭場に羅列して、衆等に施与いたします。この境界内の、十傷(の原因により死んだ)男女、無主の孤魂滞魄等の衆は、孤魂は昇天し、信者たちを恵み守って吉に導き、男女老少いづれも平安で、家々は東土に福を獲得し、戸ごとには古郷に祥を生じて、何事も意の如く、瑞気は村に満ちる等のことがもたらされますように。そのため今謹んで三寶殿の前に対し、幢幡一本を給出いたします。】

(6) 召請

次に道士は、次の文を唱え、亡魂を召請する。

初上明香初聲召請

二上明香二聲召請

三上明香三聲召請

【初めて明香を上呈し、初めて一声召請します。二回目に明香を上呈し、二回目に一声召請します。三回目に明香を上呈し、三回目に一声召請します】

初回と第二回の時は、「召請」の部分で唱えるときに、親指と人差し指の訣を結び礼をする。

三請攝召、召到本處界内、一切十傷男女、無主孤魂、或有靈無祀、或有祀無靈、或在刀兵陣上死、或在花林樹下亡、或吊頸而投河、或生産而毒藥、馬踏死身、雪漂凍死、雷鹹天誅、火焚水溺、蛇傷虎咬、土農工商之輩、鰥寡孤獨之衆、從今休問是非、各自超登歸福地、男歸男位、女列女行、有尊有卑、死無混雜、有冤有仇、各宜解釋、噴仗東極之恩光、釋北都之苦喪、願聞召請踴躍來臨、雙手撥開生死路、翻身超出鬼門關

【三度召請いたします。この境界内の一切の十傷によって亡くなった男女、無主の孤魂、あるいは靈魂があって祀る者のいない者、祀る者があって靈魂のない者、あるいは戦場で死んだ者、あるいは花林の木の下に死んだ者、あるいは頸を吊り河に身を投げて死んだ者、あるいはお産や毒薬で死んだ者、馬にふまれて死んだ者、雪の中で凍死した者、雷に打たれ天誅で、火に焼かれ水に溺れ、蛇に傷つけられ虎にかまれるなどして死んだ、土農工商の輩、孤独で独り者の人たちは、いまよりその是非を問うことなく、それぞれが現在の状況から超え登って福地に帰し、男は男の位に帰し、女は女の位に列し、尊きも卑しきも、死んで入り交じることなく、冤があり仇のある者も、各々解き放たれ、救苦天尊の恩光によって、地獄の苦しみから解放され、願わくは召請の声を聞いて勇躍として来臨し、両手で生死の道を開き、身を翻して鬼門関を超え出てくるように】

この文章の終わりのところで、道士は鐘を置き、両手に玉文のポジションを押さえ、左・右の順序で外側に動かし、一礼をしたあ

と、両手を組み合わせて、前方・右方・左方へ礼をし、拍板を一度打つ。そして中指と親指で円をつくる訣を結び、左・右・左の順序で外側に動かし、両手の親指と人差し指で円を作り、相互に上下に組み合わせ、両手を広げた後、「鬼門関」のところで一回転する。

次の句は節を付けて唱えるが、「香花請」のところでは、拍板で中央・右・左と三回卓を打つ。

香花請 香花奉請
逝水東流去 南柯乙夢長
白揚風颯颯 何處是家郷
頓聞玄音信 各各赴會場

【行く水は東に流れ去り、南柯の一夢は長し。白揚の風は颯颯として、何れの処か是れ家郷。にわかにか玄音の信を聞き、各々会場に赴く】

隨我幢幡引、受入孤筵沾法食

【我が幢幡の引くに随い、孤筵を受け入れて法食に沾わん】

ここで左手で線香と幢とをとり、幢を振る。

(7) 続いて以下の句を唱えるときには、前の句とは別の節を付けて唱える。

太上垂慈濟 憫念在寒庭
惟願陽間度 功德及幽冥
幽魂無極苦 缺衣多裸形
一衣化無量 一服表千箱
從今盡冠載 端正悉光明
我今拔度爾 萬劫離寒庭
悲夫長夜苦 熱惱三途中
猛火出咽喉 常生飢渴念

【太上は慈悲を垂れ、憫みの念は寒庭に在る。惟だ願わくは陽間は度され、功德は幽冥に及ばんことを。幽魂は極まる無きの苦、衣を欠いて多くは裸形。一衣は無量に化し、一服は千箱に表わる。今より尽く冠載(戴)し、端正にして悉く光明。我今爾を抜度し、万劫に寒庭を離れしめん。悲夫は長夜の苦、三途の中に熱悩す。猛火咽喉より出で、常に飢渴の

念を生ず】

道士は、三行目の句を唱えるところで、親指と中指を結ぶ訣を結び、さらに五行目のところで、同様の訣を結び、拍板を打ち、再び訣を結び、さらに六行目では、同様の訣を結び、前方・右方・左方・前方に礼をする。

ここで依頼者は、霊位の後方に置かれた冥衣を焼きに行く。この時は廟の中にある金炉ではなく、30メートルほど離れたところに、線路沿いにある炉で焼く。

(8)そして道士は以下の句を、節を付けて唱えながら、花の枝に水をつけ上述の方法で三回撒く。

一洒甘露雨 如熱得清涼
二洒甘露雨 神魂生大羅
三洒甘露雨 潤及於一切

【一度甘露の雨を注げば、熱は清涼を得る如く、二度甘露の雨を注げば、神魂は大羅に生ず、三度甘露の雨を注げば、潤いは一切に及ぶ】

再將法水洒孤魂 耳目咽喉盡開通
清涼甘露天尊

【再び法水を孤魂に注げば、耳目咽喉は尽く開通する】

茫茫酈都中 重重金光山
靈寶無量光 洞炤焰池坑
七祖諸幽魂 身垂香雲輿
定會青蓮花 常生自永安

【茫茫たる酈都の中、重々たる金光山。靈宝の無量光は、明らかな炎で地坑を照らす。七祖にわたる幽魂は、身は香雲の輿に垂れ、定めて青蓮の花に会い、常に生き自ずから永く安んず】

三行目のところでは、親指と中指の訣を結び、礼をする。この呪は、『無上黄籙大齋立成儀』巻36「呪食儀」に、「浄酈都破地獄呪」として見えているものであるが、この部分は二度繰り返し、「甘露雨」の部分以下を何回かくり返す。

(9)依頼者たちがもどるのを待って、道士

は線香をもち依頼者とともに、廟の中側に向かい、以下の句を唱える。ここでは曲調はそれまでとは異なる。

玉清上清與太清
生天地更生民
傳經傳法傳科典
度生度死度幽冥
對對金童扶輦下
雙雙玉女捧香花
我今皈命三清主
願俟祥光作證明
大聖三清三境三寶天尊

【玉清・上清と太清は、天を生じ地を生じさらに民を生じた。経を伝え法を伝え科典を伝え、生を度し死を度し幽冥を度す。二人の金童が輦を扶して下り、二人の玉女が香花を捧げる。私は今三清の主に歸命し、願わくは祥光が証明してくれるのを待つ】

三行目のところで、道士は礼をして線香を炉に挿し、卓に向かう。そして七行目のところで中指と親指の訣を結び、礼をして前・右・左の三方に指をはじく。最後の天尊号は二回唱える。

次の句からは、また曲調が変わる。

三清大道在雲霄
造起三天大法橋
孤魂打從橋上過
出門不怕路逍遙
大聖法橋大度天尊

【三清の大道は雲霄に在り、三天の大法橋を作り始める。孤魂は橋の上から過ぎていき、門を出たら恐れることなく路に逍遙する】

最後の天尊号は二回くり返す。

東極青華宮一座、巍巍七寶鸞林、萬真環拱瑞光中、瑞光中妙巖宮、妙巖宮内端然座、端然坐定、坐定金容、金容體跨九頭獅、九頭獅玉玲瓏、紫金瑞相洒甘露、甘露普洒、普洒無窮、無窮無盡度衆生、度衆生出凡籠、太乙救苦大慈尊、救苦尊度衆生、太乙救苦尊、惟願尊垂加護

【東極の青華宮の一座、巍巍たる七宝の霧林、万の真人が瑞光の中に取り巻き拱する。瑞光の中の妙巖宮、妙巖宮内に端然として座す。端然とした坐が定まり、坐が定まって金色の容体、金色の容体は九頭の獅子に跨る。九頭の獅子は玉のように玲瓏、紫金の瑞相は甘露を洒ぐ。甘露は普く洒がれ、普く洒がれて無窮、無窮無尽に衆生を度す。衆生を度して凡籠を出さしむ。太乙救苦大慈尊、救苦尊は衆生を度す。太乙救苦尊、惟だ願わくは尊よ加護を垂れんことを】

「太乙救苦大慈尊」の部分で、親指と人差し指で訣を結び、前方・右方・左方に礼をする。最後の二句は、三度くり返す。次の文を唱えるときには、再び調子が変わる。稽首元皇、端座蓮臺上、数朶毫光、照耀孤場上、鬼門關前、馬面牛頭、相有罪無、哀告閻羅放

大聖太乙救苦天尊

【元始天尊に稽首し、蓮台の上に端座し、数だの細かい光で、孤場の上を照らし(て下さるよう願います)。鬼門關前の馬面・牛頭は、罪の有無を見て、閻羅に釈放して下さるよう哀告して下さい】

以上の文章は三回くり返して唱え、三回目の時に「鬼門關」のところで、疏文を一回ごとに向きを変えて三回回転させ、これを三回にわたって行う。2003年に見学したときには、一回目には親指と中指の訣を結んで礼を、二回目のときには幢を振り、三回目のときには親指と中指の訣を結んで、三方に中指をはじいたあと、疏文を回転させていた。

(10)ここで道士は疏文を読み上げ、それが聞き届けられたかを聞くためにポエを行う⁴⁾。疏文には二種類のものがあり、「靈宝大法師」という文字で始まるものと、「伏以」で始まるものが用いられる。前者は一般の済度に、後者は冤親債主に対して用いられる。両者の内容と訳文を以下に紹介しておく。行替えは、実際に用いられる文書に従うが、読

点は筆者が付けたものである。

靈寶大法司 爲 托化超生事 今據
台灣省 市 路(街) 段 巷

弄 號 樓 恭就昭明廟 立壇奉
道、修齋濟度、乘福薦拔、陽上報恩

暨合眷人等、伏爲痛念

亡過 魂儀、生于 年 月 日 時

卒於 年 月 日 時、切念魂歸冥府、魄入

南柯、未申薦拔、難往生方、爰此本月()日

大吉 仗

道 恭就 昭明廟 府城隍案前、修設

正一超生濟度法事 延奉

慈尊、廣垂濟度、功德圓周、須至出給付照者

牒付執詣 眞司、沐

太上之殊恩、獲超生之妙果、永辭苦海、

托化人天、聞經悟道、逍遙仙登、

故牒

右給付亡過 魂儀 執證往生者、

天運 年 月 日給、恭請

東宮慈父太乙救苦天尊 接引生方

牒

【靈宝大法司は(人間に)托化し・超生することのために、今台湾省某市某路(街)某段某巷某弄某号某楼(の者が) 謹んで昭明廟に就き、壇を立て道を奉じて、齋を修めて済度し、福に乗じて薦拔し、この世の報恩をしようとしています。

誰それと一族の者たちは、伏して何年何月何日何時に生まれ何年何月何日何時に亡くなった誰その魂を痛み、切に魂が冥府に歸し、魄が南柯に入るように念じます。ここに本月某日の大吉に申して難を薦拔し往生できますよう、道によって謹んで昭明廟に就き、府城隍の案前に、正一超生濟度法事を修設し、慈尊を招き奉ります。どうか広く済度を垂れ、功德はあまねく行き渡り、証明書を給付し、牒文によって眞司に取り次ぎ、

太上の格別の恩に浴し、超生の妙果を獲て、永く苦海を辞し、人天に生まれ変わって、経を聞いて道を悟り、逍遙として仙界に

登ることができるように。

そのために牒文を作り、以上を亡魂誰そのために給付して、往生を証明する。

天運某年某月某日に給付する、謹んで東宮慈父太乙救苦天尊が生方に接引下さいますようにお願いいたします】

伏以

大化無方、念下土祈恩解冤

道光有感、察小民前世罪戾

台湾省 市 路(街) 段 巷

弄 號 樓吉宅居住、恭就昭明廟、立壇奉道建經、解冤放罪、祈安殖福沐恩、信士

暨合家人等、誠心叩干

聖造、具陳意者、伏念生居塵土、呵安歲月 蒙

城隍護佑 頼

聖澤匡扶、惟凡心履塵、前生今世、難免招瘴、歷劫恐

有怨對、冤親債主、牽纏茲前世之惡因、罹今世

之苦果、致家門不常、行運否蹇、身田痲疴、連年

困頓、未能開度 伏聞

大道聖澤天尊、垂慈廣開懺謝之門、矜憫陰陽、三

世因果、一切冤債罪愆、一併解除 仗

道消此本月 日大吉、虔具法筵、懺悔解冤赦罪

秉

太上垂訓、諸惡莫作、衆善奉行、一心執行以續、前世

今生之冤愆、俱得釋放、而得家門煥彩、身康命

泰、凡事如意、財丁興旺等、因合具疏文、投乞

東嶽仁聖大帝 殿前、准此赦罪施行、

謹疏以

聞

天運 年 月 日具

【伏して考えますのに、大いなる化育の力は限りがなく、下界で恩を祈り冤を解こうとす

るのを念じ、道の光は感応して、私たちの前世の罪を察します。今台湾省某市・某路・某段・某巷・某弄・某号・某樓の吉宅の居住者が、謹んで昭明廟により壇を立て道を奉じ經を建て、冤を解き罪をお赦しいただき、平安を祈り福を植え恩に浴しようとしています。信士誰それおよびその一家が、誠心からぬかずに神々の事業を侵し、具に思いを述べます。伏して思いますに塵土に生まれ、平安の歳月を送っておりますのは、城隍の護佑を蒙り、聖沢の助けを頼ってのことです。ただ凡人の心は塵を履き、前世今世では差し障りを招いたことは免れ難く、劫を経て恐らくは怨みをもつ者・怨敵と親友・債権者等がまとわりつき、この前世の悪因が、今世の苦果をもたらし、家門が定まらず、行運が滞り、身体が病気で、連年にわたって苦しんで、運が開け乗り越えることができないでいます。伏して聞きますのに、大道聖沢天尊は慈しみをたれ広く懺謝の門を開いて下さり、陰陽にわたる三世の因果を憐れみ、一切の怨み・債権・罪過をみな解除して下さいます。

道によってこの本月某日の大吉を選び、謹んで法筵を具え、懺悔して冤を解き罪を赦され、太上の垂訓をとって、諸悪をなさず、衆善を謹んで行い、一心に執り行い続けて、前世今世の冤・罪がともに許され、家門が光彩を放ち、身命が安泰で、すべてのことが意の如くなり、財産・子供が盛んになるなどを、疏文に合わせ具えて、東嶽仁聖大帝の殿前に投じお願いいたします。これによって罪を赦し施行して下さいよう、謹んで疏によって以聞いたします】

ポエがOKと出ると、依頼者は紙銭を焼きに行く。

(11) 道士は以下の文を、節を付けて唱えながら、同時に米粒と花びらを混ぜたものを五回づつ撒いていく。この時には、道士は口で息を吹きかけてから撒く。五回終わるごとに、花の枝で水を撒く。2003年3月の時に

は、二回これを行ったあと、水だけを撒き、そのあと四回にわたって米と水を撒いていた。以下の文にも見えるように、これによって食物を十分に足りるように増やしていくという意味がある。

一食變無量食、以一財化無量財、今有玉清寶章、加持法食、一二三四五、金木水火土、東王公、西王母、太乙救苦天尊、洒甘露

太乙救苦天尊

【一食が無量の食に変わり、一財が無量の財に化すように。今玉清寶章があって、法食を加持します。一二三四五、金木水火土、東王公、西王母、太乙救苦天尊、甘露を洒いで下さい】

唵嚩囉嚩長陀呬彌陀加陀彌陀豐羅里享羅里嚩耶陀同登大羅 酥陀末味天尊

太上呪法、變少變多、一粒如山、滴水成河、孤魂滯魄、永免況痾、承此道力、逍遙快樂、逍遙快樂天尊

【太上の呪法は、少なきを変じ多きと変ず。一粒は山の如く、滴水は河と成る。孤魂滯魄は、永く況痾(?)を免れ、この道の力を承けて、快樂に逍遙せんことを】

謹請變食神王、變食神吏、變此法食、充滿天地、仗此加持力、此食遍十方、普濟衆孤魂、皆生無上道 清涼甘露天尊

【謹んで請うらくは、變食神王、變食神吏、この法食を変じ、天地に充滿させるように。この加持力によって、この食は十方に遍く、普く衆くの孤魂を濟い、みな無上道に生ずるように】

逍遙遊蓬萊島、山有神仙常不老、玉京山上萬年桃、小有洞中千歲春、願孤魂回心早好向、今宵聞經悟道

大聖聞經悟道天尊

【逍遙として蓬萊の島に遊び、山には神仙がいて常に老いず、玉京山上の万年桃、小有洞中の千年の春、願わくは孤魂が回心して早く好いほうに向かい、今宵経を聞き道を悟ることを】

最後の文章のところでは、道士は親指と中指の訣を結び、三方に礼をする。

(12) これらの句を唱え終わると、道士は鐘を置き、唱えごとをしたあと、以下の文を宣し、米を三回撒く。そして再び唱えごとをして終了する。

汝等孤魂 歿 道官施妳供

一粒變河沙本處孤魂來受納

二粒變河沙本處孤魂來受納

三粒變河沙本處孤魂來受納

【あなたたち孤魂の衆に、道官(である私が)施し供します。一粒が河の砂のように多くなり、本処の孤魂は来て受納する】

好去好去、相逢不下馬、各自奔前程

【行くように行くように、逢うことがあっても馬から下りず、各々前に向かって走るように】

3. 超抜の意味と背景

3.1 超抜の構成

先述のように、この超抜の儀礼は、前論で論じた台南の紅頭法師の打城と同じように、依頼者の病気や不運の原因となっている、依頼者と何らかの関係をもった死者のたたりを除くために、死者の不満や恨みを解消し、彼らを救済するという機能を持っている。ただ打城が烏頭道士の行う葬送儀礼である功德に基づく構造をもっているのに対し⁵⁾、この超抜は普渡の簡略版となっているのが特徴といえる。

その基本的な筋立ては、(1) 始めに道・経・師への皈依を唱え、その力によって孤魂の救済・天界への往生を願う。(2) 救苦天尊へ来臨を請う。(3) 孤魂を接引する五方童子を召請する。(4) 香・花により、救苦天尊に孤魂を救い出すことを願う。(5) この儀礼を行うことによって、孤魂は超度され、生者には平安と福がもたらされるようにという願いが述べられる。(6) 地獄より亡魂が解

き放たれ、鬼門関を超え出てくるように宣せられ、亡魂を召請し法食の場へと導く。(7) 冥衣を無量に化して亡魂に給する。(8) 甘露水を撒いて喉を通じさせる。(9) 三清(玉清・上清・太清)に祥光による超度の証明を願ひ、法橋を造って亡魂が渡れるようにして、救苦天尊に亡魂の超度を願う。(10) 疏文を読み、願ひが聞き届けられたかをボエで確かめる。(11) 供物を無量の法食と化して、この法食によって亡魂が救済され、仙界に遊び、無上道を得るように祝福する。(12) 亡魂が救済され、生者に平安がもたらされるように、そして各々がそれぞれの道を行くように宣して終了する。という構成になっている。普渡に用いられる文章で構成されているが、打城と同じように、亡魂を地獄から救い出したあと、衣を着替えさせ、食を給したあと、超度して天界に送り込むというストーリーは共通していると言える。

3.2 超抜の契機と意味

前論で、祭解を行ってもらうきっかけとして、易断によって、今年は何々という煞神に影響を受けることを告げられ、その影響を免れるために行ってもらおうというパターンが、しばしば見られることを述べたが、超抜の場合には、明聖宮という祠廟において、その人の病気や不運の原因が、死者との関わりが原因になっていることを告げられ、それを解決するために、昭明廟に来て超抜を行ってもらおうというパターンが多い。

明聖宮は瑤池金母を主神とする廟で、忠孝東路のちょうど鉄道の南港駅があるあたりから、山を登った中腹の見晴らしの開けたところに建っている。この廟の霊能者である初老

の女性は、タンキーなどのように神を身体に呼び降ろすのではなく、依頼者の持ち物を手にしていると、その人の問題になっていることを読むことができるのだという。

前論で論じたように、打城の場合では、タンキーによって病気や災害の原因が、死者のたたりであることが告げられ、打城を行うに至るというパターンが多く、儀礼の中でもタンキーを通じての依頼者と死者との対話が、重要な部分を占めている。超抜の場合は死者との直接の対話という場面はないが、儀礼の直接の目的は、死者の救済であるが、本当の目的は、たたりの原因となっている死者との関係を改善することにあるという点は、超抜と打城の両者に共通しているといえよう。

注

- 1) 拙稿「台湾北部紅頭道士の祭解」(『坂出祥伸先生退官記念論集』)未出。
- 2) 拙稿「台南林法師の打城儀礼: 紅頭法師の儀礼と文献の伝統(2)」、『社会文化史学』40号、p.90-108、1999。
また呂理政『傳統信仰與現代社会』(台湾・稻郷出版社、1992)第6章「臺南東嶽殿的打城法事」
- 3) 旧暦7月に各地の廟で行われる普渡においても、簡単なものはこの小施と呼ばれる方式で行われる。ある道士の話では、普渡の時のものは、超抜の際に行われるものと多少違いがあるというが、この点については未調査である。
- 4) ボエについては、拙稿『中国の呪術』(大修館書店、2001) p.30参照。
- 5) 前掲拙稿「台南林法師の打城儀礼: 紅頭法師の儀礼と文献の伝統(2)」